研究資料

社会的「期待——一致 / 不一致モデル」に基づく
北京オリンピック日本代表選手の評価類型[†]

小野田 哲 弥^{*}

**Evaluation Patterns of Japanese Representative Athletes in the 2008
Beijing Olympic Games Based on Social “Expectation-Confirmation/
Disconfirmation Model”[†]**

Tetsuya ONODA^{*}

Abstract

The purpose of this research was to establish a model to quantitatively capture the changes in time series of a domestic public opinion toward the Japanese representative athletes in international sports events for the top athlete management. The Beijing Olympics, held in August 2008, was thought to offer one of the best cases to carry out this approach. As a result, extracting six evaluation patterns by comparing the social involvement levels between opening and closing of the Olympic games has been succeeded. The theoretical novelty of this research extends the Expectation-Confirmation/Disconfirmation Model from a “consumer” analysis to a Japanese “society” analysis.

The six evaluation patterns are: 1.Excessive Expectation type, 2.Preceded Expectation type, 3.Predetermined Harmony type, 4.Perfect type, 5.Satisfied after Viewing type, and 6. Impressed after Viewing type. The following findings were obtained from considerations of the results above. Among athletes with high performance, their expectations are high (Type 1). Sports without highly expected players might face industrial reduction in the future (Type 2). There are peculiar evaluation aspects in regard to female athletes (Type 3). The scarcity of athletes who have both high expectations and good results (Type 4). The difficulty of continuing social involvement for athletes (Type 5). The possibility of expanding social involvement rapidly, and the problems of concentrating social concern towards particular players (Type 6).

Thus, the effectiveness of the Social Expectation-Confirmation/Disconfirmation Model has been shown. However, this result might be a special case limited to the 2008 Beijing Olympics. Our future task is to apply this method to other Olympic games including the winter games and other international games. This is because it is necessary to accumulate a large number of cases in order to improve the method generally.

Key words : The 2008 Beijing Olympic Games, Athlete Management, Public Opinion Survey, Expectation-Confirmation/Disconfirmation Model, The Long Tail

[†]原稿受付 2009年1月27日

^{*}産業能率大学スポーツマネジメント研究所 〒259-1197 神奈川県伊勢原市上粕屋 1573

^{*}*Sports Management Research Center, Sanno University, 1573, Kami-Kasuya, Isehara, Kanagawa, Japan (259-1197)*

1. は じ め に

文部科学省が策定した施策文書¹⁾には「我が国のトップレベルの競技者の活躍は、国民に夢や感動を与え、明るく活力ある社会の形成に寄与する」と記されている。この記述に、マーケティング分野で台頭してきた ECR²⁾(Efficient Consumer Response: 効率的な消費者反応)の視点を加えるならば、製品(競技者)がいかに優れていようと、その活躍が国民に与える夢や感動の度合いは、消費者(観戦者)対応が適切かどうかによって大きく左右されることになる。実際に今日では、「競技者」として有能な選手をいかに発見し育成するかのみならず、メディアの機能を有効活用し、彼女/彼の「ブランド」価値をいかに高めて事業を展開できるかという、選手マネジメントの重要性が高まってきている³⁾。

本研究は、上記の問題意識に立ち、これまで一般的に行われてきた身体能力や競技成績といった「スポーツ選手」本人を主体とする選手評価とは一線を画し、「スポーツ観戦者」の視点から、選手がどのように評価されるのかを明らかにすることを目指すものである。そして、本稿の目的は、国内トップ選手のマネジメントに不可欠な情報である、国際スポーツ大会を通じた当該選手に対する国内世論の推移を把握するモデルの構築にある。数ある国際スポーツ大会の中でも、オリンピックは国民的な関心が極めて高いものの一つである。したがって、2008年に開催された北京オリンピックは、当該モデルの開発に向けた最良の場と考えられた(注1)。

スポーツ大会を通じた世論の時系列変化を捉える上で参考となる先行研究に、消費者行動研究分野において開発された「期待—一致/不一致モデル」⁴⁾⁵⁾が挙げられる。このモデルは本来、商品購入前の「期待」と購入後の「満足」の、2つの関与度間の高低比較によって顧客満足プロセスの解明に役立てるものであるが、このモデルにおける消費者を「観戦者」に、商品を「ス

ポーツ選手」に置き換えれば、同型の時系列分析フレームとして、スポーツ大会前後の比較分析に応用できると考えられる。ただし、本研究ではこのモデルを「社会的」に拡張した。なぜならば、取得したい情報は特殊な顧客の関与度変化ではなく、国民世論としての関与度変化だからである。ゆえに、通常の期待—一致/不一致モデルは消費者個人を観察するミクロ分析のアプローチを採るが、本研究では、日本国民を母集団としたマクロ分析のアプローチを採っている。

もう一点独自性を述べるならば、マーケティング分野におけるロングテール論を背景としている点が挙げられる。「ロングテール」とは、あるカテゴリー内の商品を、横軸に順位、縦軸に量(認知率であったり、売上金額であったりと量の尺度は様々である)をとって棒グラフ化した場合に、その形状が「長いしっぽ」のようになることから Anderson⁶⁾が命名した概念である。従来のマーケティングでは、売れ筋商品(ヘッド)を念頭に販売戦略が練られたが、インターネット時代のマーケティングでは、死に筋商品(テール)の価値の総和は「塵も積もれば山となる」の例えの如く、ヘッドにも匹敵するとの含意がある。この商品マネジメントに関する現代的な発想を選手マネジメントに対しても向けるのであれば、オリンピック前にすでに有名であった選手(ヘッド)のみならず、ほとんど無名に等しかった選手(テール)をも、余すところなく分析対象とすることが不可欠となる。その視点に立ち、本研究では日本代表選手339人全員を調査票に盛り込んでいる。

2. 研 究 方 法

上述のように、本研究の時系列分析フレームは社会的期待—一致/不一致モデルに基づくが、ロングテール論を背景とすることから、「期待」と「満足」の調査それぞれの前に、一つの制約を設けておく必要がある。評価対象となる選手人数が膨大なため、339人全員に対する評価を逐一求めることは、回答者への負荷を余

表 1 代表選手に対する関与度を尋ねる 4 項目の質問文

関与項目	質問文
認知	北京オリンピック日本代表選手について、おうかがいします。 知っている選手全員に、チェックしてください。
期待	あなたの知っている選手について、おうかがいします。 競技中継をどのくらい見たいですか？ 当てはまるものにチェックしてください。
視聴	北京オリンピック日本代表選手について、おうかがいします。 テレビ中継でご覧になった選手全員に、チェックしてください。
満足	テレビ中継でご覧になった選手について、おうかがいします。 今回の北京オリンピックにおける活躍に対する満足度として、 当てはまるものにチェックしてください。

表 2 「期待」と「満足」の選択肢と対応得点

得点	「期待」の選択肢	「満足」の選択肢
5	放送時間をチェックして必ず見たい。	◎期待以上
3	テレビをつけて中継されていたら注目して見たい。	○期待どおり
1	活躍しているシーンだったら一時的に見るかも。	△まずまず
0	見たいとは思わない。	×がっかり

りにも大きくしすぎてしまうからである。ゆえに、期待について尋ねる前に、知っている選手だけに限定するための「認知」調査を行い、満足について尋ねる前に、実際に競技を視聴した選手だけに限定するための「視聴」調査を行う。

したがって、評価のための入力変数は「認知」「期待」「視聴」「満足」の 4 つとなる。これら 4 変数を取得するための世論調査は 2 度に分けて実施する。北京オリンピックは 2008 年 8 月 8 日から 24 日にかけて開催されたが、その開幕直前と閉幕直後の 2 回である。1 回目に行うのが「認知」および「期待」についての調査、2 回目に行うのが「視聴」および「満足」についての調査である。それぞれに関する実際の質問文を表 1 に掲載した。なお、「認知」および「視聴」は 1/0 の 2 値データであるが、4 件法で尋ねた「期待」および「満足」は、表 2 のように、それぞれの選択肢に対応する得点を与えることとした。

3. 調査・分析方法

調査・解析のモデルとしては、他分野において同様のロングテール事象分析に実績を挙げている「柔らかな構造化モデル⁷⁾」を利用する(注 2)。その一般的なプロセスと、本研究固有のプロセスとの対応関係を表 3 に示す。以下、それぞれのプロセスの具体的手順について説明する。

3.1 インターネット調査

ロングテール論に依拠し、日本代表選手全員の名前を 2 回の調査を通じて調査票に掲載する。該当選手のリストは日本オリンピック委員会(JOC)の公式ホームページ⁸⁾(注 3)を参照することにより網羅できるが、次の 2 点が問題となる。一つ目は、リストの確定時期がオリンピックの開幕直前となることであり、二つ目は、その人数が膨大(男子 170 名、女子 169 名

表3 「柔らかい構造化モデル」の一般的なプロセスと本研究との対応関係

	一般的プロセス	プロセスの目的	本研究の具体的プロセス
1	インターネット調査	・膨大な項目数の実装 ・即時的なデータ回収	・代表選手339人の項目化 ・大会直前/直後の調査実施
2	データ補正	・バイアスの補正 ・ノイズの軽減	正規化による「認知」「期待」「視聴」「満足」の尺度統一
3	レイヤー分割	・不安定アイテムの除去 ・ヘッド～テールの段階的分離	・テール選手を分析対象外に ・分析対象選手の量的3分割
4	レイヤー内クラスタリング	・アイテム数の縮約 ・レイヤー間格差の平準化	分析対象となる209選手を73クラスに縮約
5	レイヤー統合	・ヘッドとテールの再統合 ・全体構造内の領域規定	・12のツリーの生成 ・ツリーの統合による6領域の規定

表4 本研究の調査実施期間と層別調査対象人数

	オリンピック開幕前調査		オリンピック閉幕後調査	
	「認知」および「期待」について		「視聴」および「満足」について	
	2008年8月5日・6日の2日間		2008年8月26日・27日の2日間	
世代	男性	女性	男性	女性
20代	100名	100名	100名	100名
30代	100名	100名	100名	100名
40代	100名	100名	100名	100名
50代	100名	100名	100名	100名
60代	100名	100名	100名	100名
合計	1000名		1000名	

の計 339 名) となることである。したがって面接調査や郵送用紙調査に代表される従来型調査法の適用は難しい。よって、スピーディに調査項目を実装でき、被験者もクリック一つで簡単に回答が可能な「インターネット調査」が、本件に関しては現実的に最良の調査法と考えられる。20代から60代までの日本人男女を母集団に想定し、表4の10層から100人ずつを抽出した計1,000人に対する調査を実施した(注4)。

3.2 データ補正

日本代表選手に対する社会的関与度の時系列変化を示す変数は「認知」「期待」「視聴」「満足」の4つであるが、これらの4変数のデータの性

質は大きく2つに分けられる。一つは、「認知」されている率「視聴された率」という、サンプル中何人が該当するか内部比率を示す「認知」および「視聴」。そしてもう一つは、4択の選択肢で尋ね、重みをつけて加算した合計値を示す「期待」および「満足」である。

これら、尺度の異なる2つの集計データを同一組上に載せるためには、「正規化」を行い単位を揃える必要がある。様々な正規化手法が存在するが、柔らかい構造化モデルの次のプロセス(レイヤー分割)に円滑に進むためには、負の値が含まれないことが望ましい。したがって、「認知」「期待」「視聴」「満足」それぞれの変数内で、全選手の平均と標準偏差を基に推定した標本正規分布の累積確率(0%から100%

図1 日本代表選手の「認知」「期待」「視聴」「満足」正規化合計値グラフ
(ラベル表示は9人間隔)

表5 レイヤー分割の閾値と該当選手人数

レイヤー	標本正規分布における累積確率の閾値	代表選手人数	分析対象 209
1	上位2.5%	22	
2	上位25%	59	
3	上位75%	128	
4	上位100%	130	
合計		339	

の間に分布)を、正規化手法として採用する。

3.3 レイヤー分割

日本代表選手全員について、「認知」「期待」「視聴」「満足」の各変数における正規化関与度を求め、それらを合計した値(正規化合計)を表示したものが図1である。横軸の左から降順に並べ替えている。この図は厳密なべき乗分布ではないが、裾野が広い点では「ロングテール」に類するデータと見なすことが可能である。そしてこの時点における問題点は、値の安定しない極端なテール部分に位置する選手が含まれている点、および、ヘッドとテールとの間に無視できない絶対的な格差が存在することの2点である。

そこで、これらの問題を解決すべくレイヤー分割を行う。正規化合計に対しても、その平均

と標準偏差から標本正規分布を導き、当該分布における理論的累積確率を基に、表5の基準でレイヤー分割の閾値を設定した。これにより、レイヤー4に該当する130選手は定量的に分析対象外となり、それ以上の209選手が分析対象として規定できる。またこの209選手も、明らかなヘッドに位置するレイヤー1(22選手)、ヘッド寄りのレイヤー2(59選手)、テール寄りのレイヤー3(128選手)という具合に、定量的に帰属区分が成される。

3.4 レイヤー内クラスタリング

レイヤー分割により、関与度の「総量」が同水準の選手同士に区分された。次に、レイヤー内の選手間で4変数構成の類似性を比較することにより「質」的な分類を行う。自動分類(クラスタリング)技法は諸種存在するが、本稿で

は「自己組織化マップ⁹⁾」のアプリケーションソフトウェア Viscosity SOMine 3.0J を用いる。

当該ソフトにおける Ward 法の最適化指標に基づいてクラスタ数を確定した結果、レイヤー 1 では 22 選手が 12 クラスタに、レイヤー 2 では 59 選手が 23 クラスタに、レイヤー 3 では 128 選手が 38 クラスタにそれぞれ分類された。レイヤー内クラスティングにより、分析対象の数は、209 選手から 73 クラスタに縮約されたことになる。

3.5 レイヤー統合

データのロングテール的な性質から、レイヤー分割を余儀なくされたが、解析上の最終目標は全体構造の把握にある。したがって、レイヤーを再統合することが求められる。具体的手順としては、まず、各選手の持つ正規化された「認知」「期待」「視聴」「満足」の各値をクラスタ内で平均化し、その合計を 100% とした場合に、各変数それぞれが占める構成比を求める。次に、一つ上位に位置するレイヤーのクラスタとの「類似度」を式 1 によって求め、その値が最も大きい（構成比が類似する）クラスタと結合させる。 f_{1i} はある上位レイヤークラスタの成分 i における比率、 f_{2i} は下位レイヤークラスタの同じ成分 i における比率、 k は成分数（この場合は 4）である。

$$\text{類似度} = (1.00 - \sum_{i=1}^k |f_{1i} - f_{2i}|) * 100 \quad \cdots \text{式 1}$$

上記手順により、レイヤー 1 をヘッドとしたツリー図が完成する。ツリーの数はいずれもレイヤー 1 のクラスタ数に等しく 12 となるが、レイヤー 1 内での「類似度」をも参照し、それらを統合して 6 つの評価類型としてまとめた（注 5）。

4. 結果と考察

表 6 が、社会的期待—一致/不一致モデルに基づく北京オリンピック日本代表選手の最終的な評価類型結果である。同レイヤー内での表示順は、社会的関与度の総量（正規化合計値）の降順としている。性の列は性別を示し、M が男子、F が女子である。★の列は出場種目内での

の最高順位であり、「—」は欠場/棄権もしくは予選敗退を示す（注 6）。なお、上部に記した図は各類型内における 4 変数構成比のイメージ図である。

まずこの表の概観である。大会前後の社会的関与度の比較において、オリンピック前とオリンピック後が同等である類型は類型 4 のみであり、他の 5 類型はどちらかに比重が偏る結果となっている。オリンピック前の関与度の方が高い評価類型が類型 1 から類型 3、他方、オリンピック後の関与度の方が高い評価類型が類型 5 および類型 6 である。各類型およびレイヤー区分に関する帰属選手数における特徴としては、最も人数の少ない評価類型はレイヤー 1 の 8 選手のみから成る類型 4 であり、他は左右に進むほど帰属選手数が増える。レイヤー 3 までの総数では、期待偏重型の類型 1 から類型 3 が 110 選手、満足偏重型の類型 5 および類型 6 が 91 選手と大差はない。しかし、類型 1 はレイヤー 2 が多く（33 選手）、類型 6 ではレイヤー 3 が多い（68 選手）といった違いがある。大会前後を通じて有名性が高い選手ほどレイヤーが上位に位置するという特性を踏まえれば、以上より 2 つの点が指摘できる。一つは、著名選手ほど期待外れの際の落胆が大きいという点である。そしてもう一つは、事前にはほとんど認知されていなかった選手であっても、オリンピックでの活躍により、一気に社会的関与度を高める可能性があるという点である。

以下、選手マネジメントの観点から、類型ごとに概説を述べる。

4.1 評価類型 1：期待過剰型

類型 1 は、オリンピック前の関与度は非常に高かったが、オリンピック後の関与度は極めて低くなった選手が分類される。このためこの評価類型を「期待過剰型」と定義する。「期待」の高さに連動して「視聴」が高くなるのも特徴である。この類型には 49 選手が該当し、競技種目としては、平時からテレビ中継の機会が多い男子野球が 19 選手と最大、バレーボールが

男女合わせて13選手とこれに続く。個人種目としては、前回アテネ大会金メダリストの室伏広治選手（男子ハンマー投げ）、柴田亜衣選手（女子競泳800m自由形）、鈴木桂治選手（男子柔道100kg超級）、野口みずき選手（女子マラソン）が含まれることから、ディフェンディング・チャンピオンへの社会的な期待は否が応でも高まらざるを得ず、結果が伴わなかった場合の落胆も一際大きい点が指摘できる。団体種目である野球に関してもこの点は通底し、2006年に開かれた第1回ワールドベースボールクラシック（WBC）での優勝が、事前の関与度を大いに高めたため、落胆もそれに比例して大きくなった可能性が推察できる。

4.2 評価類型2：期待先行型

類型2は、類型1よりも「認知」「期待」「視聴」がやや低く、「満足」が若干高い選手が分類される。そのため、類型1よりも表現を弱めた「期待先行型」として定義する。類型1と比べて「期待」や「視聴」が低い理由は、大会前のコンディションの悪さや、登場機会や中継機会の少なさによる視聴不足などが想定され、一様ではない。またチームの結果が悪いなりに、個人としての活躍が光った選手も該当する。種目別に見ると、類型1同様に野球（5名）やバレーボール（11名）からの該当選手も多いが、この類型は最も該当選手数の多い男子サッカー（15名）と、全3選手が含まれる男子マラソンによって特徴づけられる。さらに重要な点は、彼らがすべて、社会的関心がおしなべて低いレイヤー3に帰属している点である。これは当該種目における注目選手の不在を意味する。かつて、オリンピックにおいて男子マラソンの金メダルが期待されていた頃の選手や、2002年FIFAワールドカップ日韓大会前のサッカー日本代表選手を対象に同様の調査を実施したならば、少なくとも数人がレイヤー2以上に帰属したと考えられる。若手有望株の育成やメディアへの露出を図るといった選手マネジメント戦略が、当該種目の産業規模縮小を回避するため

に不可欠だと指摘できよう。

4.3 評価類型3：予定調和型

類型3は、高期待低満足型ではあるものの、類型1や類型2よりも明示的に高い「満足」が得られた選手が分類される。結果が予想の範囲内だったと解釈し「予定調和型」として定義した。幼少の頃から注目を集めてきた女子卓球の福原愛選手、出産後に銅メダルを獲得した女子柔道48kg級の谷亮子選手、アイドル並みの人気を集めた女子バドミントンの小椋久美子選手・潮田玲子選手ペアの健闘は、讃えられてしかるべきとの社会的評価であろう。加えてこの類型には、男子選手4人に対して女子選手10人が該当する点を指摘しておかなくてはならない。上述の、出産や容姿への注目に加え、女子重量挙げ48kg級の三宅宏実選手に見られるような、父親（三宅義行コーチ）が元メダリスト（1968年メキシコオリンピック銅メダル）といった特徴は、ジェンダー研究の俎上に再三挙がってきた重要テーマだからである¹⁰⁾¹¹⁾。このような女子選手特有の性質が、男子選手とは異なる評価をもたらす要因となっている可能性があることは、選手マネジメントに関しても性別で異なる方策が求められるとの視座を提供する。

4.4 評価類型4：高期待高満足型

類型4は、「認知」「期待」「視聴」「満足」がすべて揃って高いために、それらの構成比がほとんど等しくなる選手が分類される。全員メダリストであり、社会的関与度の総量が最大のレイヤー1に帰属することから「高期待高満足型」と定義した。全員が前回アテネ大会の代表選手である点も共通しており、男子競泳100m・200m平泳ぎの北島康介選手がアテネオリンピック、北京オリンピックともに2種目金メダル、女子競泳200m平泳ぎの中村礼子選手が同2大会ともに銅メダルであり、女子レスリングの4選手も同様に前回大会と同じ色のメダルを獲得したメダリストである（55kg級の吉

田沙保里選手と 63kg 級の伊調馨選手が金メダル, 48kg 級の伊調千春選手が銀メダル, 72kg 級の浜口京子選手が銅メダル)。残る陸上の 2 選手は, 男子 4 × 100m リレーの銅メダルがオリンピックでは初のメダル獲得ではあるが, 末續慎吾選手は 2003 年世界陸上パリ大会 200m で銅メダルを獲得, 朝原宣治選手は 12 年前のアトランタオリンピックから継続して 100m で注目を集め続けてきた選手であり, 著名選手である点で共通している。類型 1 から類型 3 のレイヤー 1 に帰属する選手も金メダル獲得ならば, ほぼ間違いなくこの類型に分類されたと考えられ, 選手マネジメントにおける最終目標地点となる評価類型が, この類型 4 だといえよう。

4.5 評価類型 5 : 視聴後満足型

類型 5 は, オリンピック前の社会的関与度をオリンピック後のそれが上回った選手であり「視聴後満足型」と定義できる。レイヤー 1 の 3 選手 (女子柔道 63kg 級の谷本歩実選手, 男子体操団体総合の富田洋之選手, 女子柔道 78kg 超級の塚田真希選手) とレイヤー 3 の鹿島丈博選手 (男子体操団体総合) は, 前回アテネ大会でも金メダルを獲得した点で類型 4 とも共通するが, 「認知」および「期待」が低かった点は重要な示唆を含んでいる。なぜなら, 仮に結果が伴わなかった場合には, その存在が再認識されることがなかった可能性も指摘できるからである。この点から得られる選手マネジメント上のポイントは, たとえ輝かしい成績を残したとしても, 当該選手への注目度が長続きする保証はないという点である。したがって優れた成績を残すことばかりに注力するのでは選手マネジメントとして十分ではなく, タレント性のある選手の注目度を平時からいかに高く保持できるかが, スポーツ産業が本来有している価値を損なわないためにも必要な戦略といえよう。

4.6 評価類型 6 : 視聴後感動型

類型 6 は, オリンピック前にはほとんど認知されておらず, したがって期待もされにくかつ

たが, オリンピックでの活躍により, 多くの人々に視聴された選手であり, 結果が伴ったことで満足も得た選手である。類型 5 よりも「視聴」および「満足」の比率が突出して高いことから, 表現を強めて「視聴後感動型」と定義した。この評価類型に含まれるのは 74 選手だが, そのうち金メダリストが 18 名, 銀メダリストが 6 名, 銅メダリストが 10 名であり, 5 位以内の選手が全体の 93.2% を占めている。このことから, スポーツ選手の成績と視聴者の満足との間に, 高い正の相関関係があることは間違いない。成績だけ見れば, この類型は類型 4 にも匹敵するが, 明らかな違いは下位レイヤーの比重の大きさに求められる。すなわち, オリンピック前後を通じた社会的関与度の総量は大きくないものの, 北京オリンピックを機に, 飛躍的に注目度を高めた選手たちといえることができる。その典型として, 既出類型 4 の末續慎吾選手と朝原宣治選手とともに男子 4 × 100m リレー銅メダルのバトンを繋いだ塚原直貴選手と高平慎士選手, 男子柔道 100kg 超級金メダルの石井慧選手, 男子体操個人総合銀メダルの内村航平選手, 男子フェンシング銀メダルの太田雄貴選手らが挙げられる。またメダルを獲得できずとも, 女子バドミントンで世界ランク 1 位の中国ペアを破った末綱聡子選手・前田美順選手ペアのように, 一気に社会的関与度を上昇させるケースも存在する。ただし, 彼女たちは同種目レイヤー 1 の小椋久美子選手・潮田玲子選手ペアの注目度が視聴の機会を後押しした側面もあると考えられ, 同様の指摘は, 同じくレイヤー 1 に福原愛選手を擁する女子卓球の平野早矢香選手および福岡春菜選手についても指摘できよう。また団体種目に関しては, 上位レイヤーに位置する選手が限られることから, 特定の選手にメディア報道の注目が集中する傾向も読み取れる (ソフトボールの上野由岐子選手, 女子サッカーの澤穂希選手など)。

5. 結論と展望

本研究の新規性は大きく 3 点にまとめられ

表7 日本代表選手の男女別評価類型およびレイヤー帰属人数

レイヤー	高期待低満足型						4.高期待高満足型		低期待高満足型				合計	
	1.期待過剰型		2.期待先行型		3.予定調査型				5.視聴後満足型		6.視聴後感動型			
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
1	2		3	1		4	3	5	1	2		1	9	13
2	21	12	4	4		2				1	6	9	31	28
3	10	4	29	6	4	4			7	6	13	45	63	65
類型内 合計	33	16	36	11	4	10	3	5	8	9	19	55	103	106
	49		47		14		8		17		74		209	
大類型内 合計	110						8		91				209	
	73			37			3	5	27		64		103	106
	男子			女子			男子	女子	男子		女子		男子	女子

る。1点目は、選手を評価するモデルを「観戦者」主体で構築すべく、ミクロな消費者行動研究分野のモデルである「期待—一致/不一致モデル」をマクロな世論調査モデルとして拡張し、それをスポーツ選手の評価に応用したという点である。2点目は、ロングテール論を背景とし、出場選手全員を調査票に限なく掲載して調査を実施したことにより、大会後に社会的関与度を大いに高めた選手についても、大会前との比較を実証できた点である。そして、3点目は、個別具体的なスポーツ選手を対象に、6つの評価類型を明確に定義した点である。以上から、選手マネジメントに関するいくつかの有用な知見を導くことに成功した。

それらは、実績者に課される過大な期待（類型1より）、高期待選手の不在から懸念される該当競技種目の産業的縮小（類型2より）、女子選手に向けられる特有の評価視点（類型3より）、期待に結果が伴うことの稀少性（類型4より）、社会的関与度持続の困難性（類型5より）、飛躍的な関与度拡大の可能性と一部選手への関与度集中の問題（類型6より）などである。これらは、特定スポーツ分野の振興目的や、自社商品の特性に合致した選手とのスポンサー契約、テレビやイベントへの出演交渉に活かされる知見であり、とりわけ我が国においても昨今勃興してきている選手マネジメント会社の戦

略に寄与する情報である。

しかしながら、本研究で定義した6類型は、北京オリンピック日本代表選手の評価のみに限定されるものあり、この評価類型を一般化するためには、数多くの事例蓄積を必要とするため、慎重でなくてはならない。例えば、表7は各類型と各レイヤーに帰属する代表選手の人数を性別にカウントしたものである。この結果は、男子選手に対しては落胆が、女子選手に対しては感動が多く残ったことを数値的に裏付けるものである。飯田¹²⁾の実証研究を参考にすれば、平時では男子選手偏重のスポーツ報道であるため、男子選手に対して期待が集まり、オリンピック開催期間中だけはそれが男女平等に変化するため相対的に女子選手に対する満足が高くなったと解釈できよう。ただし、北京オリンピックに限っては、その主因が金メダルを期待されて4位に終わった男子野球（選手数24名）と強敵アメリカを降して金メダルを獲得した女子ソフトボール（選手数15名）に拠るところが大きいため（注7）、この一般化に疑念が残らなくもない。両種目とも次回ロンドン大会では正式種目ではなくなることが国際オリンピック委員会（IOC）により決定しており、この点を与える少なからぬ影響を、次回大会時における同様の調査実施によって捕捉することが肝要である。また、仮に本稿で提示した6類型が維

持されるとしても、北京オリンピックを機に注目度の上がった、女子サッカー、卓球、バドミントン、フェンシングといった競技の選手が、ロンドンオリンピックではどの類型に属することになるのかは注視すべき点であり、それらを含む全種目の、評価類型およびレイヤーの帰属変化の情報は、各種目が置かれた産業的価値を判断する上での、一つの材料になるようにも思われる。

最後に、本稿はテレビメディアに媒介されたスポーツ選手とスポーツ観戦者との関係性に焦点を当て、現実的に浸透しつつある「商品としてのスポーツ選手」の側面から、北京オリンピック前後の観戦者反応を実証した研究資料である。生身のスポーツ選手に対して、商品同様の評価手法を適用する本研究のような商業主義的なアプローチは、「文化としてのスポーツ」の価値を貶めるものとして、研究手法それ自体が批判の対象になることを認識する¹³⁾。しかしながら、批判者側の立場からも、「スポーツ選手の商品化」としての現状把握と、その問題点の改善に向け、本資料が活用されれば幸いである。

2010年が明けて間もなく、冬季バンクーバーオリンピックが開催される。夏季と冬季の比較をはじめ、他の国際大会などにも広く当該モデルを適用し、汎用性を高めた上で、様々な角度から利用可能な研究資料を、今後も継続的に提出していくことを、将来的な目標としたい。

(注1) 北京オリンピックに対する国民の関心の高さは、本文中の調査において、オリンピック期間中に競技中継を一切視聴しなかった回答者の比率が、全サンプル中10%未満(9.5%)に留まることからしても明らかである。

(注2) 「柔らかな構造化モデル」の応用事例としては、マンガ家や食材を分析対象とした以下の研究がある。小野田哲弥；マンガ事象におけるサブカルチャーの領域規定—20代・30代読者のマンガ家認知情報に基づく構造分析—、マンガ研究, Vol.4, pp.190-225, 2003。妹尾紗恵；食材相関図からみた料理構造解析—安定性と可

変性にみる日本の家庭料理, 日本家政学会誌, Vol.59, No.4, pp.211-219, 2008。

(注3) 野球の「佐藤隆彦」のみ、埼玉西武ライオンズにおける登録名「G.G. 佐藤」の方が一般的であるため、これに差し替えている。

(注4) 調査は、国内最大級のモニター数を有する株式会社ネットマイルに依頼した。本調査の母集団は「20代から60代の日本国民」であるが、インターネット調査会社の会員モニターを利用している点において、標本抽出上の問題点がある。しかしながら、最近では個人情報保護意識の高まりから従来型調査の回収率が著しく低下してきており、政府系調査や学術調査においてもインターネット調査の利用が進んでいる。社会調査法に忠実な標本抽出が理想的ではあるが、現実的にはインターネット調査に頼らざるを得ない現状にあることを理解されたい。この問題については、以下の論文に詳しい。原純輔；社会調査の行く手, 日本世論調査協会報, 98, pp.13-16, 2006。

(注5) 実際の詳細なツリー図は <http://smrc.mi.sanno.ac.jp/smrc/blogpic/onoda03-4.pdf> において参照可能である。

(注6) 北京オリンピック閉幕時点での順位である。上位選手のドーピング等での失格により、今後順位が変動する可能性もある(例えば、男子ハンマー投げの室伏広治選手は、2008年12月11日に3位へと繰り上がった)。

(注7) 例えば、次の雑誌では「祝・女子ソフトボール 奇跡の金メダル」と「北京の屈辱 星野ジャパン、惨敗」という対称的な記事が掲載された。Sportiva (スポルティーバ), 集英社, 2008年9月25日号。

参 考 文 献

- 1) 文部科学省, 世界の頂点をめざして, 2007。
- 2) 植村文信; ECRの源流を遡る, ロジスティクス・ビジネス, 2002年10月号, pp.58-61, 2002。
- 3) 小笠原悦子; トップスポーツ選手のマネジメント, スポーツマネジメント, 第8章, pp.172-192, 大修館書店, 2008。
- 4) Cardozo, R. N.; An experimental study of consumer effect, expectation, and satisfaction, Journal of Marketing Research, Vol.2, pp.244-249, 1965。

- 5) Oliver, R. L.: A Cognitive Model of the Antecedents and Consequences of Satisfaction Decisions, *Journal of Marketing Research*, Vol.17, Nov., pp.460-469, 1980.
- 6) Anderson, Chris ; The Long Tail, *Wired Magazine*, <http://www.wired.com/wired/archive/12.10/tail.html>, 2004.
- 7) 小野田哲弥 ; 柔らかい構造化モデルーロングテール事象のカテゴリーマネジメント支援ー, 政策・メディア研究科博士学位論文, 慶應義塾大学, 2007.
- 8) 日本代表選手団認定一覧, 日本オリンピック委員会, <http://www.joc.or.jp/beijing/athlete/index.html>, 2008.
- 9) Kohonen, Teuvo ; Self-Organized Formation of Topology Correct Feature Maps, *Biol. Cybern.*, Vol.43, pp.59-69, 1982.
- 10) 稲葉佳奈子 ; 表象としての女性アスリート, *現代スポーツ評論*, Vol.5, pp.172-178, 2001.
- 11) 飯田貴子 ; 新聞報道における女性競技者のジェンダー化, *スポーツとジェンダー研究*, Vol.1, pp.4-14, 2003.
- 12) 飯田貴子 ; ジェンダー視点から検証したアテネオリンピック期間中の新聞報道, *スポーツとジェンダー研究*, Vol.5, pp.33-44, 2007.
- 13) 佐伯年詩雄 ; 現代スポーツへの眼差し, *現代スポーツのパースペクティブ*, pp.11-21, 大修館書店, 2006.